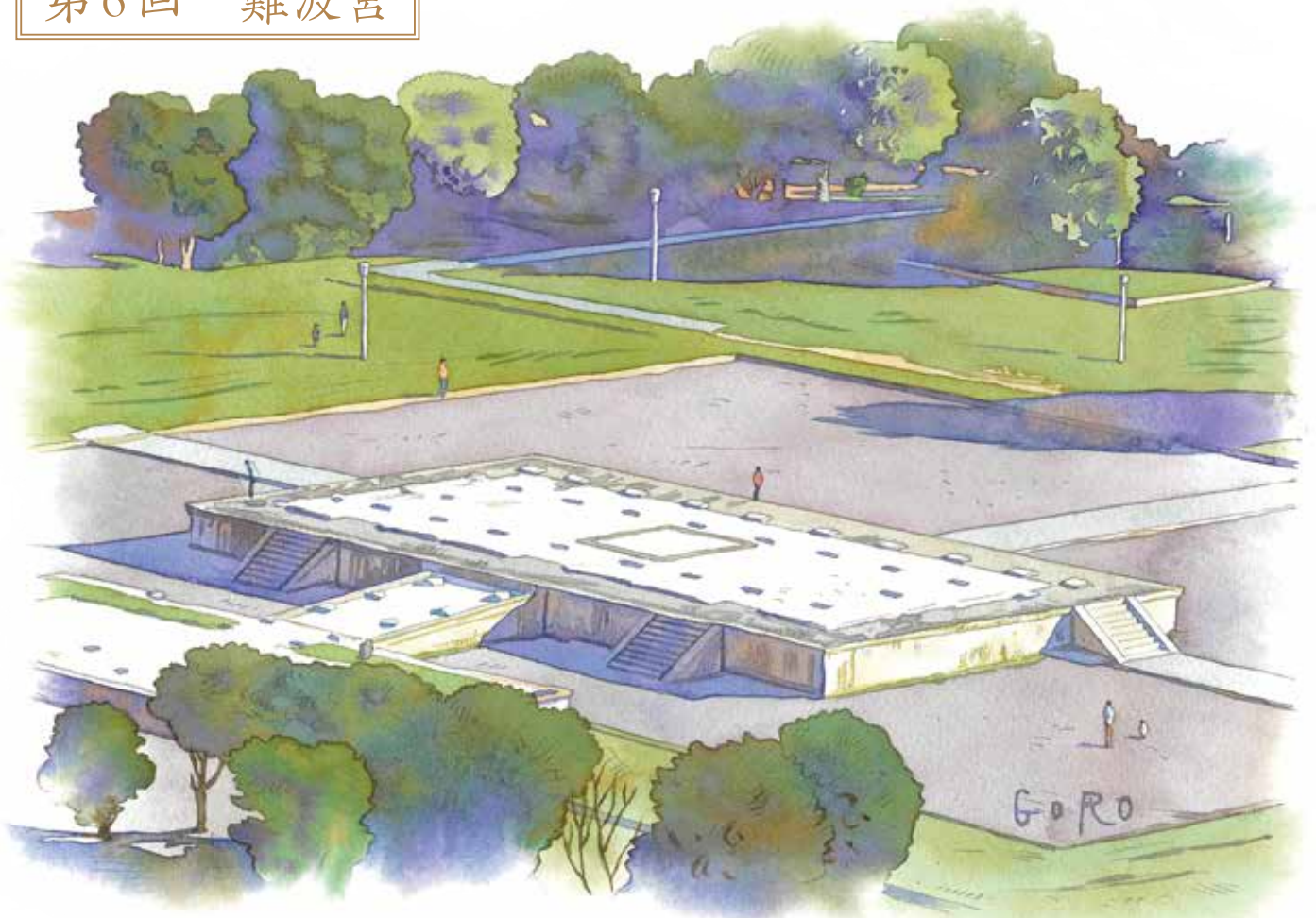




難波宮跡公園に復元された後期難波宮の大極殿基壇 だいごくでんきだん

古代の大阪の中心は、南北に延びる半島状の上町台地で、その東西は湿地帯と海だった。その上町台地の突端付近に豊臣秀吉は大坂城を築いたが、古代から周辺に何度も宮が造営された場所でもある。地政学的に重要な場所だったからだ。そのなかでも、画期的な宮城・きゆうじょう長柄豊碇宮（前期難波宮）が、乙巳の変（645年）の蘇我入鹿暗殺のあと即位した孝徳天皇によって造営された。代ごとに宮を遷していた時代は終わり、永久都城の建設が試みられ、難波宮は何度も再利用されていく。

また、難波宮は隋や唐で生まれた「都城」とじょうに学び、律令制度の原点となる新たな宮であった。ちなみに「宮」は「ミ（御）」と「ヤ（屋）」で王宮を意味し、「都[ミヤコ]」

は「ミヤ（宮）+コ（処）」で、王と役人たちが活躍する場を指している。

宮城や都城は律令土地制度のための「原器（物差し）」でもある。日本中の土地を均等に分割して民に貸し出すための基準となるから、正確な四角形が求められた。また、律令制度は隋や唐を見習ったが、都城整備も、遣唐使が知識を持ち帰ったようだ。ただし、日本風にアレンジしてある。中国の都城との決定的な差は「高い城壁を持たなかった」ことだ。これは、ヤマト政権の伝統でもあった。ヤマト建国の地・纏向遺跡（奈良県桜井市）も、防衛を無視している。



関 裕二

歴史作家、武蔵野学院大学日本総合研究所のスペシャルアカデミックフェロー。著書に『古事記の正体』（新潮新書）、『アマテラスの正体』（新潮新書）など。



所在地
大阪市中央区